

照木でございます、こんばんは。5月12日は水野さんの特許翻訳、それから5月19日は吉川先生の日仏文化の交流の今昔という講義の紹介者としてこの壇に上がりましたが、今晚は私自身がお話をいたします。

私は実は、表芸はフランス語・フランス文学でありまして、日本語は実は裏芸であります。(笑)音楽はかくし芸でありまして。ただ前回は吉川先生のお話でありましたので。吉川先生は現在、フランス文学研究の第一人者でありましたので、今晚、私は日本語についてお話をいたします。

それは時々世の中の方があまり根拠なく、日本語は世界一難しいとか、世界で有数に美しいということを知ることがありますが、それが実は気になっているからです。言語学的にそれが正しいのであれば問題はありませぬ。ところが必ずしもそうではない。私は水野さんのように9ヶ国語も知りませんが、それでも日本語より難しい言葉があるということはよく存じております。また日本語が美しい言葉かどうかということについても、あまり語られておりませぬ。先日、中村明さんという日本語の文体に関する専門家が『美しい日本語』という本を出されましたけれども、これは日本人が見て、美しい日本語の表現と思われるものを集めたもので、こういうわけで日本語は美しい言語といえるといったものではありません。そこで実は「日本文体論学会」というものがありまして、私もその会員であります。そこで「日本語は美しいのか」というシンポジウムをやりたいと思ったわけです。文体論学会には英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、その他いろいろな言語の専門家が集っているので、例えば英語の場合に英語は美しいと言えるのかどうか。ドイツ語はどうなのか。そういう話をさせていただいて、それに対して日本語の場合はどうかというふうに、それぞれからお話をいただきたいと思ったのですが、何故か皆さん、実は尻込みをしまして実現いたしておりませぬ。そこで私はフランス語と日本語しかよく知りませぬけれども、そのふたつの点を比較しながら日本語が美しいかどうかについてお話をしたいと、こういうわけです。

私が大学院を修了いたしました1960年に、インドネシア政府は日本が払った戦時賠償金を使って、5年間100人ずつの学生を日本の大学に送り込むということになりました。その第一陣が1960年に到着いたしました。外務省は文部省と相談いたしまして、一年間その留学生に日本語を、それから大学で受ける諸学科の準備教育を行なって、翌年3月に東大、京大、慶應、早稲田、その他の全国の大学に送り込むということにいたしました。

当時、日本では千葉大学と東京外国語大学などで細々と留学生を受け入れる教育を行っていましたが、この全体、1年に100人という学生を受け入れる力がなくて急遽、人を集めて教育を行なうことになりました。私はこの時に、この教育に参加いたしまして3年間これを行いました。これが、私が日本語を裏芸とするに至ったきっかけであります。これはなかなか貴重な経験でありました。というのは、日本語のイロハも知らない学生、そして100人の学生を7、8のクラスに分けて一年間イロハから始めて大学で講義が聴けるようにするという、そういう実験でありました。ですからそれはなかなか大変だったわけですが、その

話は今日は時間がありませんので、そこまでにいたします。

そして世界の言語の中でフランス語が美しい言語と言われることがありますが、これは根拠があるのであります。17世紀の初め、大体1620年にランブイエ侯爵夫人、カトリーヌという人がいまして、この人がその館にお客を集めて「サロン」を開きました。この「サロン」で行なわれたことを中心は、実は美しいフランス語の会話を楽しむということでありました。もちろんパリにはフランスの宮廷があったわけですが、当時、宗教戦争その他のために、そこに集る貴族達はなかなか乱暴者が多くて、ランブイエ侯爵夫人はその雰囲気が気に入らなかつたわけでありまして。それで自分のところで洗練されたフランス語を喋る貴族を集めてサロンを開いたわけでありまして。この時、そこにヴォージュラというサヴォワ出身の若い貴族が加わりまして、この会話を熱心に聞いて、フランス語に関する注意書きというものを残しました。この頃にコルネイユやラシーヌ、あるいはモリエールといった文学者、パスカルとかラ・フォンテーヌとかラファイエット侯爵夫人という人達はその周囲におりまして、そのランブイエの館で用いられるフランス語をもとにして数々の芝居、小説を、それからパスカルは哲学的な文章をいろいろ残しました。これに使われたフランス語が今日のフランス語の基礎となったわけですね。今でもフランスの学校では、これを守るために日本の2倍くらいの時間をフランス語の学習に充てています。

私が見た小学校の記録映画のようなもののなかで、卒業をする生徒に先生が「中学校に行ったら、しっかりやらなければだめだよ」という話の時に、「君は大体、不得意な学科は何だ？」と言ったら、これから中学校に入る小学生が口を膨らませて“Le français (フランス語)”と言うから、なかなかフランスの子供にとってフランス語の習得は大変なものであったのだらうと思います。

そして私がフランス語を教えているときに、フランス語の殊に初級の「規則」－フランス語の「規則」はなかなか大変で難しいんですね。ですからよくフランス人に「こんな規則はやめたら？」と言いますと、「どうして？」と言いますから、「フランス人だってこういう規則をみんな守れないじゃないか」と言いますと、「それは教養がないからだ」と冷たく言うんですね。ですから教室におけるフランス語の授業も非常に沢山ありますし、それから木曜日だと思いますが、高校生になりますと国立劇場のラシーヌとかコルネイユといったものの芝居の公演を見せるというふうになっていて、それで美しいフランス語を維持するというための工夫が行なわれています。

一方日本ではどうかということではありますが、明治維新の後で各藩から集った武士、あるいは旧幕臣達が政府を作りましたが、ご存知のように各藩でいろいろな方言を使っておりました。そのためにこの明治政府が緊急に必要としたことは、集った人達が意思の疎通を図るために「標準語」を作り、これを普及させるということでありました。

丁度ひと月ほど前に『如蘭会名簿』というのが届きました。これは私の出た高校の卒業生の名簿であります。この学校は後に東京府立第一中学校、それから東京都立第一高等学校になり、現在は日比谷高等学校となっております。この名簿の第1回の卒業生の中に上田万年(ウエダ・マンネン)という名前があります。この上田万年という人が標準語を作るための中心になった人です。第1回の名簿を見ますと、そこには尾崎紅葉が同級生でいます。

初期の頃の卒業生は15人くらいずつですが、第2回には夏目漱石があり、谷崎潤一郎もその頃に卒業しております。何故か横山大観の名前もあります。この上田万年が1895年に書いた『標準語に就きて』という中で、「教養ある東京人の話す言葉を標準語の中心にする」というふうに推奨いたしました、これが基本となりました。

私の父は実は東京の麻布で生まれまして、麻布小学校に入って後に大森に転居いたしました、入新井小学校を出ました。私の母も大森の山王にいまして入新井小学校を出ております。私が子供の頃に、父が母に向かって同じ小学校を出ているわけでありますから、「小学校の頃知っていたら」と言いましたら、母はにべもなく「知らなかったわよ」と言っておりました。父は「6年生と1年生にいたはずだから知っているはずだ」と言う。たわいない話をしていただいております。父はその後、大正8年に区立一中を卒業しまして第二高等学校を経て帝国大学に進み、官僚となりました。母は千代田区にある三輪田女学校を出ております。私は昭和21年に都立一中に入学いたしまして27年に日比谷高校となった高等学校を出ました。こうした私事を述べますのは、上田万年が標準語のモデルに思い描いたのは、実は私の家庭で使われていたようなものであるというふうに思われたからであります。

次に、その標準語をどのようにして普及させたかという話になります。大正14年に普通選挙が実施されましたが、テレビはまだありません。ラジオはありましたけれども、ラジオは必ずしも標準語の普及に力があつたとは思えません。学校教育はどうかということですが、もちろん学校教育は中学校、高等学校、大学は標準語で行なわれましたし、小学校においても教科書は標準語でありましたけれども、必ずしも小学校の生徒は標準語が地方においては十分にできたとは言えません。それは父の転任で私は、いろいろな地方へ移動しました時にそのことを痛感いたしました。

ですから転任する度に、実はイジメの対象になるというふうに思っていました。大体、戦争中に新潟に転任になったのですが、そこで学校へ行くのに半ズボンで行って、そういう子供はいない。それからジャンパーを着て行ったのですね。その前には実は、西宮夙川という所におりましたために元町で買ったのであろう服装で行きましたから、これは危ないことだと思ってどうしたらいいか。言葉も違いますから、ガキ大将になるより仕方がないと思ってガキ大将になるのに成功いたしました。(笑)

50年後にその昔の小学校の同窓会をやるというので出ましたけれども、その時に集った人は「照木さん、昔はコワかったよ」と言うけれども、それはイジメに会わないために取った行動でありました。

それでこの標準語の普及に力があつたのは、私の推測ですが、軍隊と出版であります。軍隊は指揮系統、命令系統を通じさせるために各方言を使うことを許しませんで、軍隊用語を作りました。例えば「僕」とか「私」ということは言わせないで「自分は」というのは作った軍隊用語で、その他にもいろいろな軍隊用語を作りました。軍隊はここにいらっしゃる方はほとんど軍隊の経験はないと思いますが、全ての人が軍隊に何らかのかたちで参加いたしましたので、そこで標準語を教わったというふうに思います。ですから女の方は軍隊に行きませんから標準語が出来ませんでした。

それから公式用語、例えば官庁用語というのがある。今でも官庁用語というのがある、

例えば法律文は官庁用語で書かれる。難しいといわれていますが、これも標準語で伝えるためにそういう用語を作ったわけでありませぬ。

さらに日本は識字率が高かった。文盲がいなかったのですね。これに関しては第二次大戦が終わった後に、日本に来た占領軍のCIE(連合軍総司令部民間情報教育部)という民政局の人達が、日本が敗れたのは漢字などという難しい言葉を文字を使っていたためであって、これを止めさせてローマ字にしようという考えを持っていたのです。ですからもしかすると、今のあなた方は漢字ではなく、ひらがなでもなく、ローマ字を使わなければならない恐れがあったわけです。ただその時に日本人はどのくらい字が読めるのかを調査するという。全国の一人一人くらいを取り出しまして試験をする。その試験問題を柴田武、石黒修とか金田一春彦とかそういう人たちが問題を作って調査をした。その調査が実は非常に点数が高かった。文盲は1%くらいしかいませんでした。それでアメリカの民政局にいた人達は非常に驚いてローマ字に変えるのをやめたそうです。それから日本では本を読む人が多かったです。これは昔、漢字を読むのが難しいのでふりがなを付けるという習慣がありました。

終戦後5年くらい経って山本有三などがふりがなをやめて、その代わり当用漢字で漢字を制限するというふうにしたために、あんまりそれはよくなかったのではないかと思いますけれども、しかしそれまでに日本人は多くの方が本を読むことができたわけです。これを見て、大日本雄弁会講談社—講談社は、元々は大日本雄弁会講談社という名前でありまして、それは標準語で人前で話をするための会を作り、そこがいろいろな出版物を出しました。大人向けには『雄弁』と『講談倶楽部』。年少者向けにはまずは絵本。講談社の絵本というのがある。まずそれが最初です。その次に『幼年倶楽部』。それから『少年倶楽部』、『少女倶楽部』というのがありました。これはそれぞれ、例えば『少女倶楽部』で言いますと吉屋信子(ヨシヤ・ノブコ)とか川端康成が標準語で書いた少女小説を載せている。そういうものを読んだわけです。それからその他に講談社は単行本も沢山出しました。これが標準語の普及に大いに役立ったと思います。

これを見て改造社—『改造』という雑誌を出していた—は『現代日本文学全集』を作りました。これは1冊1円で売り出したために「円本(えんぼん)」と言われた。初めは40巻くらいで予約を募集したら35万部の予約数があった。それで改造社は驚いてこれを拡大して60巻の『現代日本文学全集』を作りました。

さらに春陽堂は負けじとばかり『明治大正文学全集』を作り、新潮社は世界文学を日本語で読む—翻訳で読む—という計画で『世界文学全集』を出し、これによって標準語の文体が確立いたしました。

また改造社の円本こと『現代日本文学全集』、それから春陽堂の『明治大正文学全集』、これはそれぞれ、例えば夏目漱石はひとり1巻、芥川龍之介は短編が多いために久米正雄(クメ・マサオ)と二人で1巻というふうにして作ったわけでありませぬ。これによって言わば現代日本文学の正典(セイテン)—つまり日本文学で中心になるべき作品というものをこれによって正典することができたわけです。

この傾向は実は大衆文学にも広がりました。初めは「講談」というのは話すのを聞くわけですが、そのうちそれを本にしたものが出まして、それから「新講談」という寄席で話すの

とは全く別な講談を書く人が出てきました。例えば白井喬二(シライ・キョウジ)という人は『大菩薩峠』というものすごく長い小説を書きました。それを引き継いで吉川英治はいろいろなものを書きました。大佛次郎(オサラギ・ジロウ)の『鞍馬天狗』。野村胡堂は『銭形平次』を135編書いています。現代に近づきますと、例えば藤沢周平というふうに引き継がれております。

更に岩波書店は『日本古典文学大系』という古代から現代に至るまでの文学作品を集めたもの。筑摩書房は現代を中心とした文学全集を次々と出し、更に岩波は岩波文庫を編纂いたしまして日本や世界の優れた作品は全て日本語で読むことができる。そういう状況を作り上げて今日に至っております。

皇族は昔、例えば『古今集』は皇室が中心になって作った和歌集であります。『古今集』を初めとして『勅撰和歌集』を次々と作って出しました。更に新年に歌会始(ウタカイハジメ)というのを行いまして、今では歌会始はテレビで放送もされておりますが、皇族を初め、優れた国民から歌を集めてそれを披露するというを行なっております。これは世界中を見ても、こういうことをしている皇室・皇族というか、あるいは大統領を初めとするそういう人達がそういうことをやっている例は他にはありません。

こうやってみると明治以来、日本が美しい日本語を維持するために大きな努力を続けてきたということがよく分かります。その結果、今日、日本語が乱れているという批判はありますけれども、なお美しい日本語が読まれたり、書かれたり、話されたりしております。フランス人は、教養ある人の第一条件に美しいフランス語を話すということを挙げております。ここに集った方々も美しい日本語を読んだり書いたりすることによって、教養ある日本人になり、周りの方にもそれをお見せいただくことを期待しております。以上でございます。

照本先生：

質問があれば、多少承ります。

宮代会長エレクト：

口語体と文語体について今後、続きが聞きたいです。

照本先生：

例えば日本語は、明治以前の日本語と明治以後の日本語はかなり違います。歌舞伎の台詞を聞いても、明治時代には今の日本語と違う。明治の時に上田万年を中心にして標準語を作った。それで大きく変わったわけですが、しかしながら、例えば川端康成という人は中学生の時に『源氏物語』の原文を声を出して全部読んだそうです。それで川端康成の文章は、現代の日本語として非常に優れたものでありますが、そういうことを聞くとなるほどという感じが致します。

それから谷崎潤一郎は、府立第一中学校で夏目漱石とほぼ一緒の時ではありますが、この人は戦争中に灯火管制というのがありまして、空襲があると明かりを囲って外に明かりが漏れないようにした中で『細雪』を書いていた。これは実は非常に不思議な話でありまして、彼は芦屋に住んでいて関西も空襲を受けましたが、その中で日本語を伝えなければならないと思って『細雪』を灯火管制の暗い中で毎晩書いていたんだそうです。『細雪』はお読みにな

った方はお分かりになると思いますが、関西のブルジョアの家の京都に花見に行くとか、神戸にご馳走を食べに行くという話なのですね。それを戦争中、爆撃がある中で日本語を残さなければと書き残したというのはちょっと感動的です。

谷崎は元々日本橋で府立第一中の出ですが、字の分は標準語の普通のものですが、会話の部分は船場の人達の言葉をうまく使っている。そのために実は彼は奥様を取り替えて、細君・松子さんに教わってそれを書いていたというわけです。そういうふうにして日本語を伝えてきたと私は思っています。

そういう先輩達の努力を無にしてはいけません。昔、外国人は日本へ来ると電車の中で日本人が本をよく読んでいるので驚いたそうではありますが、この頃は本を読んでいる人が少なくなりました。スマホをいじっている人が多くてちょっと心配であります。ですから日本においては、美しい日本語を書物で読むことができるので、なるべくそういう機会を持っていただくといいかと思えます。

日本にはサロンがないのですね。それでランブイエ侯爵夫人のサロンというのはフランス文学のために大きな力を果たしたので、美しい日本語を維持するために、このロータリーのクラブというのは、これは一種のサロンだと私は思っておりますので、お力をいただきたいと思っております。どうもありがとうございました。(拍手)

<閉会点鐘・黒岩会長>

私には今日が一番勉強になった例会ではないかなと思っております。そういえば私も小学生の頃は《春がきた、春がきた、野にもきた》とか歌の言葉も久留米弁ではなく標準語で書いてありました。《松原遠く〜》とか歌の文句も方言ではなく標準語で書いてありました。僕はそういう教育を受けていたのに、どうして抜けないのかなと。その頃は、学者・諸先生のご苦勞が分からなかったのですね。僕も青年会議所のときに自衛隊に1週間くらい訓練に行ったことがあるのですね。その時は確かに軍隊用語に近い言葉とか敬礼をしたりとか。一切方言はありませんでした。やはり軍隊訓練とか学校の教科書とかは、そういう先生方が見直しをして、方言を廃して標準語で書いて、それで書かれた教科書で勉強をしていたんですね。私も田舎でしたけれども確かにそういう教科書で学んできましたが、本当に忘れておりました。今後は小学校・中学校の教科書を思い起こして、会長職もあと1カ月で終わりですから、一生懸命美しい日本語を学びたいと思えます。それでは第56回目の例会を終了させていただきます。